



酒田船箆筒の復興と 「ものづくり」への想い

加藤木工 加藤 渉

二〇一九年私は酒田船箆筒の復興を目指して酒田に帰省しました。

我が家は父の代で三代続く指物(さしもの)業を営んでいます。指物は釘などを極力使わずホゾと呼ばれる凹凸加工を用いて、箆筒などを組み立てる木工技術です。

酒田船箆筒は指物・金具・漆塗の工程に分かれます。帰省当時には指物業の我が家以外の工程を担う職人は居なくなっている状況でした。

木工に関わる業態だけでなく金具職人・漆塗職人を探すことは難しいと判断した私は、異業種でも酒田市内で協力者がいないものかと情報を求めました。

酒田市内外であれば容易に見つかるのかも知れませんが、ここまで酒田市内にこだわるというのは、酒田船箆筒を完全酒田市産で復興す

ると同時に、経済産業省から伝統的工芸品へ認定してもらいたいです。

酒田船箆筒を復興させるには「ものづくり」として造るだけではなく、ブランド構築も必要だと感じています。

少しでも酒田船箆筒復興活動に興味を持ってもらえればと、ネコ型の「こけし」ねこけしを開発し注目を集めるようにしました。この施策はSNS(ソーシャルネットワーキングサービス)で成果を得ることになります。

SNSでねこけしを見た美術関連会社からフランス・パリで開催される美術展覧会へお誘いを受けたのです。お誘いを受けた際に「ねこけしだけでなく、船箆筒も展示させてもらいたい。」と願い出て承諾

してもらえました。

二〇〇四年インテリア会社に勤めていた私は、イタリア・ミラノで開催された国際家具見本市に出展し、現地訪問した経験があります。

ミラノの街並みには古い建造物が多く、歴史を重んじる国民性を感じました。世界各国から出展された家具を見ながら「ヨーロッパ圏に和家具を出展できれば、物珍しさも相まって商機があるかも。」と根拠はない自信を持ったのです。

経験を持つ塗装職人に協力してもらい、なんとか体裁を整え出展しました。

私の中では完成度七十%の船箆筒でしたが、パリ美術展覧会では、「船箆筒って何?」、「素材は何?」、「どうやって作っているの?」、「北前船って何?」と、パリ市民に素人の質問とは思えない内容を問いかけられる程、興味を持って頂けました。成約には至りませんでした。購入希望者もいて、商機は確実にあると感じました。

ミラノで感じた自信は、パリで確信に変わりました。酒田船箆筒の復興はまだまだ始まったばかり。

製作については、金具製作職人を見つけることが当面の目標です。

あわせてパリでの成果を活かし、SNSを中心とした情報発信を継続します。

これからも酒田船箆筒を世界に、そして未来に引き継ぐため、挑戦を続けていきます。

歴史公文書の保存と活用について(二)

東北公益文科大学准教授
酒田市公文書等管理委員会

門松 秀 樹

今回は、酒田市の「特定歴史公文書」を実際に利用してみるといふ点を中心に、筆者自身の経験などを踏まえていささかの案内などをしてみたい。

まず、酒田市の「特定歴史公文書」は、デジタルアーカイブ化されていないため、原史料、すなわち、当時作成された資料の現物を直接閲覧することになる。

資料を閲覧するには、「特定歴史公文書利用請求書」に必要事項を記入の上、市役所四階の総務課に提出する必要がある。利用請求書は、酒田市のホームページからダウンロードすることもできる。

なお、利用請求書には「識別番号」や「目録に記載された特定歴史公文書の名称」を記入する必要がある。このため、酒田市ホームページで公開されている「特定歴史公文書の目録」を参照して、閲覧したい資料を絞り込む。

もっとも、自分が調べてみたいと思う情報がどの資料に載っているのかははっきり分からないという場合もある。

るだろう。その場合は、目録の「備考」や「内容」の欄に記載された資料についての説明が役に立つ。紙幅の関係があるので詳細な説明ではないが、何を扱った資料なのかは判別できる。

利用請求書の提出後、三日以内に申請した資料の閲覧や複写などが可能かどうか、酒田市より通知がある。閲覧が可能である場合は、中町支庁の光丘文庫で閲覧することになる。

ところで、前回は「特定歴史公文書」は市民にとって貴重な財産であると述べた。市民が自らの財産を閲覧するのに、なぜ市の通知を待たなければならぬのか、という疑問を持たれる方もおられるかもしれない。これには理由がある。

一つは閲覧を希望している資料の保存状態である。資料によっては劣化により一般向けの閲覧が困難な場合がある。

例えば、明治以降に欧米から導入された製紙法で製造されたいわゆる洋紙は酸性紙と呼ばれる。酸性紙は、製

造の際に使用される薬品の関係で時間の経過とともに微量の硫酸が生じて紙の繊維を傷めてしまう。このため、普通にページを繰ろうとすると紙がバラバラに砕けることもある。

和紙はこうした薬品を使用せず中性紙と呼ばれており、酸性紙と比較して保存状態が良好な場合が多い。俗に「和紙は一〇〇〇年、洋紙は一〇〇年」などといわれる所以である。

一方の和紙にも「虫食い」の問題がある。文字通り、虫が紙を食べてしまうことにより、資料に穴が開くのである。単純な丸い穴であれば問題は少ないかもしれないが、複雑な形で数ページに及ぶ穴が開いている場合、ページを繰ろうとすると引っかかって紙がちぎれてしまう場合もある。

さらには、戦時中から戦後直後にかけては戦争の影響による原料不足のため、著しく紙質が悪化しており、かつて和紙に筆で墨書きの江戸時代や明治前期の資料の方が保存状態がよい、といったこともある。

このため、閲覧申請のあった資料が閲覧可能な状態であるかどうか、現物を入念に確認しなければならないのである。

もう一つはいわゆる個人情報保護の問題である。現代の行政資料を情報公開請求に基づいて開示させると、人名などが墨塗りだらけになっていて、「海苔弁当」などと揶揄されることがあるが、「特定歴史公文書」であってもプライバシーは保護されなければならない。

例えば、筆者が閲覧した「明治十三年役場開設簿(東田川郡役所)」では、明治一四年に作成を予定していた戸籍に関する雛型の資料が含まれていた。そこにはなんと「棄児」の項目がある。幸い雛型であり、具体的に人名が記載されていたわけではないので、完全な状態で筆者は閲覧することができた。もし、具体的な人名が記載されていた場合、本人が存命の可能性はかなり低いだろうが、その子孫の方は現在もどこか

で暮らしているだろう。自分の祖父・曾祖父が「棄児」であることを公開されることは望まぬ。まして、差別や偏見につながりかねない内容が記載されている場合はなおさらである。

古い時代の資料といっても、現代につながる歴史の一部である。ゆえに、慎重に審査する必要がある。申請したその場で閲覧ということができないことがお分かりいただけるだろう。

こうしたチェックを経て、「特定歴史公文書」は閲覧できるようになる。酒田市の「特定歴史公文書」は、当時に作成された現物を閲覧できる。ページを繰るとき紙の感触など、モタモタ越しに画像を見ることが異なり、歴史の重みを実感できるところがよいところだと筆者は考えている。



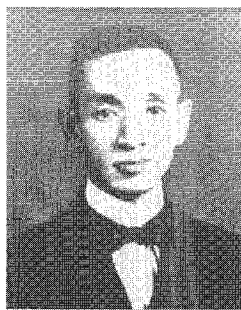
「棄児」の文字が明記された戸籍調査表の雛型とその手引き

雑誌『群像』と川柳家・荒木京之助

―財団法人光丘文庫初代文庫長・荒木彦助の功績―

光丘文庫調査員 柏倉由紀子

財団法人光丘文庫が創立したのはちょうど百年前、大正十二年（一九二三）の六月一日です。本間家八代目当主・光弥が図書館建設費、維持基本金十万円と蔵書二万冊を贈正五位本間四郎三郎光丘翁頌徳会に寄贈した日を以て創立の日としています。この光丘文庫初代文庫長となったのが、荒木彦助です。



荒木彦助（彦太郎・京之助）

荒木は本名・彦太郎、豪商で知られる先代荒木彦助の長男として明治二十三年酒田市下内匠町に生まれ、田中内匠町に生まれ、庄内中学、旧制第二高等学校（仙台）を経て京都帝国大学で学びます。秀才で多趣味、文学・美術に造詣深く、剣道四段で自宅に道場を開いていました。酒田米穀取引

所仲買人であり、実業家としても活躍しました。また京之助と号し、近代川柳で酒田の草分けともいえる川柳家でした。当時「柳樽寺川柳会」をおこし「大正川柳」を刊行していた川柳の大家・井上剣花坊に大きな影響を受けたようです。昭和二年三月『荒木京之助句集』が出版され、この序文で、剣花坊は荒木の非凡な才能をほめ、野口雨情は「米じゃ庄内港じゃ酒田、日和山まで船が来る」の詩を贈っています。

の十三号までは月刊でしたが、その後不定期となり、昭和二年五月の二十一号で廃刊となりました。

佐藤三郎は「酒田文壇今昔記」（『週刊酒田』昭和二十二年十二月十六日号）に、群像時代と題して連載六回にわたる評を書いています。

『木鐸』に寄った多士彩々の人物に比べると『群像』の人々はどう見ても柄が小さい。一酒田の政界雑事をあげつらい選挙の下馬評に夢中になったり、花柳界ゴシップを漁ったり、さては楽屋落ちの「遊び」に終始したさまは、この雑誌を低俗化せしめた大きな原因であろう。」と手厳しいのですが、「荒木氏が執筆したものと思われる図書館に関する論評、同人合評会「光丘文庫に対する注文」などが注目される記事である。庄巻は第三巻第二号の「最上川記念号」である。これは全頁「最上川清譜」にあ



『群像』創刊号

てた特集号で、最上川の流れに沿って本県の地誌沿革を探り、最上川に因んで吟まれた詩歌、紀行を集めた貴重な文化資料である。」と書いており、生彩を放つ荒木京之助と評価しています。

『群像』第一巻第四号から、荒木の論評を拾ってみます。

―米国に於ては図書館の設立に対し各都市に法律を以て権利の付与、義務の負担があり英国は特殊課税を以て建設経営せしめたる如き、如何に図書館事を重視したか：今日の教育は画一教育であって自己の教育ではない、其画一制度の覇絆を脱して自己を教育せねばならぬ：図書館そのものは社会教育の異名であって即ち社会教育そのものである：架上の図書は悉く閲覧者の手に渡るべく、社会の全ての読者の為に図書館は備えて置く：図書館には活動があり、書籍は生きている：各地の図書館はローカルカラーの発揚に努むるの風が頻りに生じている。単に郷土の地誌、歴史文字、風俗、習慣のみではない。市民の日常生活に切実なる関係方面に注目されて

来たことは等閑にすべからざる問題―

荒木の光丘文庫に対する熱意が伝わってきます。

大正十二年といえは関東大震災が起こった年ですが、荒木はこの時神田連雀町の宿におり、震災に遭遇しました。『群像』第一巻第三号に「東京大震災体験記」を載せています。十月二十一日には小幡楼で東京震災遭難生還祝賀会を開催したと編集だよりにあります。

結びに『荒木京之助句集』より光丘文庫を詠んだ二句を紹介しします。

キラキラと屋根が
光って樋の音
窓帷の内に燦く涙のみ

令和四年度、光丘文庫資料データベースに「財団法人光丘文庫資料目録」を追加登録しました。キーワードで資料検索が可能です。酒田に図書館を設立すべく奔走した人々の記録を是非ご活用ください。

※参考文献『寸方 第九号』「川柳人物史とその流れ」庄司芳雄著 1982

日和山「文学の散歩道」の案内(四)

―港町酒田を愛した俳人・秋沢猛―

日本現代詩人会員 相 蘇 清太郎

酒田市日和山公園に整備されている「文学の散歩道」は、酒田を訪れた文人墨客や酒田出身の俳人、詩人などの詩文を刻んだ文学碑二十九基が、散歩しながら鑑賞できるように配置されている。

これまで二回は、松尾芭蕉が「おくのほそ道」の途次、酒田で詠んだ句(碑文三基)について、句会を共にした酒田の俳人(伊東玄順・俳号不玉、寺島彦助・俳号安種など、近江屋三郎兵衛・俳号玉志)に触れた。時代は十七世紀末、元禄のことであった。前回は、酒田の詩人・佐藤十弥を取り上げた。今回は、高知市出身で酒田で高校教師(英語)をして、俳人として活躍した秋沢猛の句碑を観てみよう。

港町酒田を詠った句

秋沢猛の句碑は、酒田港(本港)を背景にして立つ。鳥海山花崗岩を用いたもので、とても大きく堂々としている。秋沢猛句碑建立委員会

(太田権六委員長)により、多くの句友、同人、市民などの協力を得て、一九八四(昭和五九)年に建立されたもので、碑文は次のとおりである。やはらかに蝙蝠あげぬ港町

昭和三八年の作。碑文のために猛自身が選句した。句意は「酒田港の夕暮れ時、蝙蝠(こうもり)がふわふわと飛んでいた。下から誰かが糸を繰って凧でもあげているように。」と自註している。

鷹羽守行は句碑建立リーフレットに、「句碑の句を味わう」として、「やはらかにがフンワリとせかず急がず柔らかない蝙蝠の飛び方を指すとともに、また誰しも抱く、そこはかとなき郷愁の感じに通うようです。しかも、人が凧でもあげているような連想も働き、蝙蝠と人間との間に眼に見えぬ糸があるような気がします。

その糸は、その土地に住む人びとの心であり今は見ら

れぬ蝙蝠と人びとの心とが、切っても切れない郷愁でつながりあっているようです。蝙蝠が港町の魂、土地の精や霊として、今も見えない姿で飛び続けていることでしょう。」と述べている。秋沢は感謝の言葉の中で、「私にとって酒田港は私の心であり、蝙蝠はその象徴のつもりであります。」と述べている。

コウモリは、今の時代は見かけることがないようだが、鎮守の森の太木の洞(うろ)などに棲み、夕暮れになると次々、茜の空に飛び立っていったものだ。酒田の街なかでも、大きな神社の樺などの大木から飛び立っていたらう。糸で凧でもあげているように、ひよいとひよいと左右や上下にゆれて飛んだ。障害物にすばやく反応する動物(哺乳類)で、とても賢い生きものの子供たちは思い込んでいたものである。

秋沢猛の活躍

秋沢猛は、秋元不死男(一九〇一〜七七)主宰の「氷海」に加わり、秋元亡き後は、新庄市出身の鷹羽守行主宰「狩」の同人として活躍した。また自身

が主宰する「氷壁」などにより俳句の指導・育成・普及に力を注いだ。酒田市民俳句大会は昨年に六六回目を迎えたが、大会を主催する酒田俳句連盟を率いた猛の力が大きかったように思われる。

秋沢猛が酒田や庄内を詠った句は多い。掲句の後の()書きは秋沢の自註である。遠き雪嶺馬穴を叩く鯨の尾

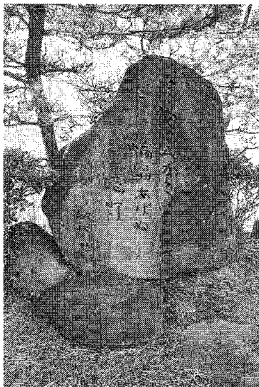
(昭和三五年作 秋元不死男先生を迎え、酒田市の街川で投網漁をした。獲物の鯨の尾が馬穴を叩く音が寒かった。川上に鳥海山の雪嶺が聳えていた。) 糞一滴涙一滴寒鴉

(昭和三五年作 鴉が沢山住みについている。厳冬の朝見上げてみると、一羽の鴉がぼつりと糞を落とした。涙であったか。) 夕立後さきさきと裁鉄

(昭和三八年作 夕立が過ぎ爽やかになった。妻が縁先で布を裁っていたが、さきさきさきという音が爽やかさを掻き立てていた。) 秋沢猛にとって酒田はふるさと以上の町であったようだ。「氷壁 第一〇七号秋

沢猛追悼号(遺句集)(昭和六三年 氷壁俳句会)には『海猫』以後の句が多く収められている。

秋沢猛(一九〇六一〜八八)略歴 高知市生まれ。名古屋高商卒。酒田市で高校英語教師を務める。一九五一年に秋元不死男「氷海」に入門、五四年同人。五九年「氷壁」を創刊、主宰。七八年、鷹羽守行の「狩」創刊に同人参加。北国の風物を親しく詠み、軽みの表現のなかにおかしみと悲しみを湛えた独自の作風を深めた。作品の底に誠実な人間味があった。句集に、「寒雀」(一九六四・二二) みちのく豆本の会、「海猫」(七八・九) 深夜叢書社、「自註現代俳句シリーズ秋沢猛集」(八六・二) 俳人協会。(稲畑汀子・大岡信・鷹羽守行監修「現代俳句大事典」三省堂、による。)



秋沢猛の句碑

徳尼公御像の修復事業と現在の三十六人衆

酒田三十六人衆代表 須藤 秀明

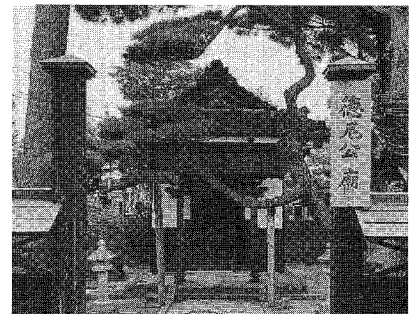
かつて寺町と呼ばれた中央西町にある泉流寺の境内南西には、酒田の豪商であり、日本一の大地主と呼ばれた本間家三代当主光丘が寛政二年（一七九〇）に建立した徳尼公廟があり、そこには同じく本間光丘と酒田三十六人衆が明和元年（一七六四）に京都の仏師に制作させた徳尼公像が祀られています。

酒田の発祥伝説において語られる徳尼公とは、文治五年（一一八九）、奥州藤原氏が源義経をかくまったことで、源氏に滅ぼされた際、三十六人の従者に守られ落ち延びてきた藤原秀衡の妹あるいは後室とされる女性です。その徳尼公は、藤原家の菩提を弔うため、尼となり向酒田（現在の宮野浦）に庵を結び、建保五年（一二二七）四月十五日に入寂されました。その後、比丘尼庵として受け継がれていたその庵に、海晏寺を退院した僧侶が移り住み、現在の泉流寺となりました。

平泉から流れてきたという意味でその名が付いたとされています。徳尼公が亡くなってから、公を守ってきた従者たちは地侍となり、三十六人衆と名乗って廻船業を営むことで、酒田湊の繁栄を築きました。こうした由来から、徳尼公は酒田の開祖と言われています。

その後、江戸時代には、酒田三十六人衆は本町に居を構え、藩命を受けて酒田の町政を担いました。しかし、明治時代になると、新政府の中には組み込まれず、その役割を終えることとなりました。

しかしながら、その三十六人衆の子孫たちは、現在に至るまで、四月十五日の徳尼公の命日には、御像を本堂まで運び、法要を営んでおります。徳尼公が亡くなってから続いていると考えれば、実に八百年以上続く行事です。また、藤原氏の菩提寺である平泉の中尊寺に、毎年代表を立て



御像が安置されている御廟

てお参りに伺うことで、徳尼公の思いを現在につないでいます。

御廟については、明治三十三年、平成十六年に修繕を行ったことが記録として残っており、永年にわたって三十六人衆が守り続けてきたことが示されています。近年でも令和元年に、軒先部分の漆喰の剥落や御廟を覆う木板の変形を受け、修理を行いました。

その際に改めて拝見したところ、最も大事な徳尼公の御像にも相当の傷みが見受けられました。市指定文化財でもあることから、市の担当課と相談し、専門の事業者に調査を依頼したところ、表面塗膜の剥離や矧目の遊離、部材の接着のゆるみなどから、今後、像を維持、保存していくこと

が大変困難な状態になっていくことが分かりました。

こうして泉流寺、泉流寺護持会、市とも相談し、令和四年度事業として、本格的な修復を実施する運びとなりました。

四月十五日に命日法要を行った後、抜魂供養を行い、同日に事業者の工房に移動し、修復を開始しました。修復にあたっては、現在の御像の持つ印象を保つことを前提とし、今後の安置、運搬に不安のない状態にすることを基本的な考え方としました。

七月二十六日には、泉流寺の和尚さんと三十六人衆の代表が上山の工房で中間検査を行いました。その時は、表面塗膜の剥離の修復を行っているところでした。大変細かい作業で、工房の担当の方が御像の状態を確認し、御像と対話しながら、じっくりやりますと話すのを聞いて、修復にかけてくださっている愛情の深さを大変ありがたく感じるところです。

今回の修復で特徴的だったのは、落ち込んでいた頭部に留木を増やしたこと、着物の裾が台座に当たり圧迫していたため、畳を敷いて接着

面をなくしたことです。これにより、御像の背筋が伸び、りんとした御姿になりました。

修復の完了後、十月十三日に入魂供養を行い、十月十五日には、酒田市総合文化センターで報告会を開催しました。修理報告および徳尼公と三十六人衆についての講座を行った後、泉流寺に移動し、修復した御像を拝観しました。多くの出席者の皆さんからとても喜んでいただきました。

三十六人衆の子孫である私たちは、祖先が大事にお祀りしてきた、そして酒田の歴史を語る上でも重要な御像、御廟を今後も誇りをもって守り、平泉との御縁を大事にしていきたいと考えております。

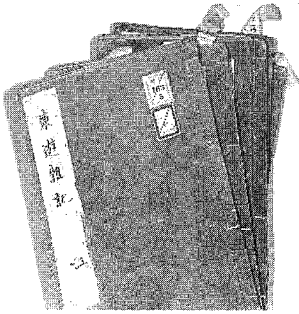


修復を終えた徳尼公御像

光丘文庫所蔵資料紹介 ―江戸期の紀行文―

数ある紀行文の中で江戸時代の紀行といえども思いつくのは松尾芭蕉の「おくのほそ道」ですが、他にも多くの紀行が残されています。光丘文庫には古川古松軒の「東遊雑記」が所蔵されており、光丘文庫デジタルアーカイブでも画像付きで紹介されておりあります。

「東遊雑記」は「おくのほそ道」とは異なり、格調高いものではなく、庶民の日常や風俗、生活について具体的に記され、気付いたことや批判的な見解も述べられています。



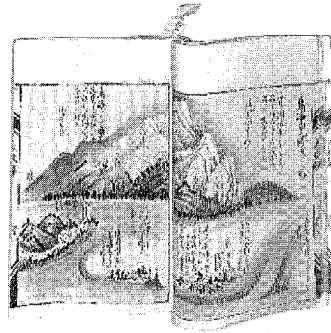
東遊雑記

酒田市史によると、著者の古川古松軒は名は辰といい、備中国に生まれ幼少より地理学を好み、蘭書から測量の

デザイン 佐藤 十弥

術を学び、広く海内を漫遊し、その見聞したところを数多くの書物に残しています。

「東遊雑記」は天明8年に徳川幕府の巡見使藤沢要人ら一行一七名に随行し、東北經由で蝦夷の松前に赴いた時の記録です。

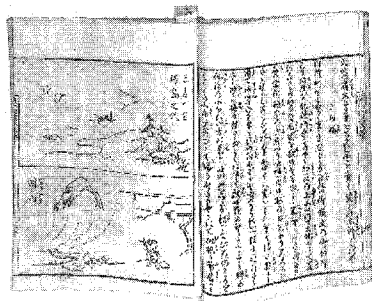


「東遊雑記」鳥海山を望む挿絵

江戸から福島・山形を経て最上川を下り庄内に入り、鶴岡から羽黒に参拝し、小国・鼠ヶ関から温海・大山を経て酒田にやって来ました。庄内に入ってその第一印象を「…富饒の百姓も数多見え、人足に出るものの衣服もいやしからず、馬なども肥えふとり、かざりも美々しく、山川草木、上々国の風土なり」と繁榮ぶりを記しています。この本には挿絵も多く描かれており、鳥海山もていねいに描かれています。

「東国旅行談」は関東の武蔵野国生まれ、松井寿鶴齋が書いた本で、天明九年に刊行されました。関東から東北にかけての見聞が記されています。酒田市史によると「古郷武蔵」から松島見物に出かけ、その道すがら見分した珍しいことなどを書き留めた」とあります。

巻三の酒田のところでは山王祭、鳥海山、飛島の蛸、飯森山、花紋燭、根曲竹、鶉渡川原のざら梅などの記事が書かれています。



「東国旅行談」飛島の蛸・祈山(飯森山)の挿絵

松井寿鶴齋は酒田のことを「商人船はみなここに着岸し東奥北陸の産物を交易して利潤の売買金銭の取引に市をなし町の繁花なかなかに筆に尽がたし」と表現し、これも当時の酒田の繁榮ぶりを記しています。

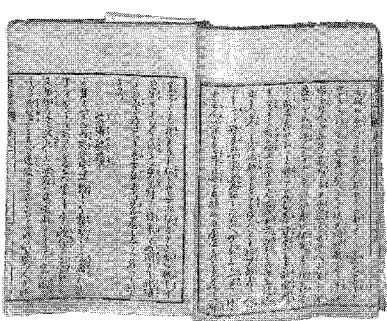
発行 酒田市社会教育文化課 酒田市立光丘文庫

「西遊記」「東遊記」を書いた橋南蹊が酒田に来遊したのは酒田市史によると天明四年三月二十一日のことです。



東遊記

橋南蹊は、名前は春暉といひ、京都で医師をしていました。京都で医師のため弟子のたが葉草採集のため弟子の養軒とともに関東、関西を漫遊し、数多の国の奇事、珍事、事象などを記したのが「西遊記」と「東遊記」です。「東遊記」一之巻に吹浦の砂を記した「吹浦沙磧」という章があります。



東遊記「吹浦沙磧」

酒田に着いた翌日、朝早く出発した橋南蹊らはさっそく庄内ならではの強風に見舞われ、やっとの思いで吹浦までたどり着くのでした。「唐詩にいへる北風動地とはかかる景色ならん。…日本のうちにかかる所ありとは聞きも及ばざりしが…」と観光目的だけならばこの国に立ち寄るのは、必ず風が穏やかになる四月以降に立ち寄るべきだと記しています。

光丘文庫 所蔵展

「近世軍記物で知る合戦」と題し、二月六日(月)から八月二十八(月)まで光丘文庫所蔵展を開催します。

【執筆者紹介】▽▽▽

- 加藤 涉 (加藤木工)
- 門松 秀樹 (東北公益文科大学准教授・酒田市公文書等管理委員会委員)
- 柏倉由紀子 (酒田市立光丘文庫調査員)
- 相蘇清太郎 (日本現代詩人协会会员)
- 須藤 秀明 (酒田市立資料館館長)

酒田市本町二丁目二番四五号 酒田市中町一丁目四番一〇号

電話(24)二九九四番 電話(22)〇五五一番 印刷 明微出版(株)